

第23回フィロロギカ研究集会

2024年10月12日(土)

ハイブリッド開催
於 成城大学

発表要旨

An Examination of Horace's Laxative Food Recipes in *Serm.* II. 4

Karisa Liu

This presentation examines the laxative food prescriptions in Horace's *Serm.* II. 4. 27-29, focusing on the use of shellfish, herbs, and Coan wine as remedies for constipation. Through a dialogue between Horace and Catus, the text highlights the culinary art and medical knowledge prevalent among Graeco-Roman aristocrats. By comparing Horace's recommendations with similar prescriptions in the Hippocratic Corpus, I argue that the understanding of food's medicinal properties was widespread in this period. By analyzing specific lines from Horace's work, which advocate for the consumption of mussels, shellfish, shortleaf sorrel, and white Coan wine while linking these substances to earlier medical treatises that describe their wet and warming properties, this exploration suggests that, despite his non-medical background, Horace adeptly integrates established medical knowledge into his culinary discourse, illustrating the interplay between gastronomy and health in ancient Rome.

アリストテレス『詩学』における詩と絵画の類比について

VI. 1450a37-b4 に関する分析

劉思敏

アリストテレスは『詩学』VIで、悲劇の定義(1449b21-31)とそれを構成する六要素—筋(ὁ μῦθος)、性格(τὰ ἦθη)、思考(ἡ διάνοια)、語り(ἡ λέξις)、作曲(ἡ μελοποιία)、視覚(ἡ ὄψις)—について論じている(1449b31-1450b20)。この中で、「筋」は悲劇にとって最も重要とされ、その次に重要な要素として、「性格」が挙げられている。その論述の中で、彼は詩と絵画との類比関係を導入し、絵画における染料に対しての像の重要性を強調している(1450a39-b3:

παραπλήσιον γάρ ἐστιν καὶ ἐπὶ τῆς γραφικῆς· εἰ γάρ τις ἐναλείψει τοῖς καλλίστοις φαρμάκοις χύδην, οὐκ ἂν ὁμοίως εὐφράνειεν καὶ λευκογραφήσας εἰκόνα)。

しかし、この類比関係の導入が何を説明するためのものなのか、全体の議論にいかんにか位置付けられているのかを理解するには困難が立ちほだかる。当該箇所直前に“ἀρχὴ μὲν οὖν καὶ οἶον ψυχὴ ὁ μῦθος τῆς τραγωδίας, δεύτερον δὲ τὰ ἦθη (a38)”とあるが故に、この類比は自然と筋の重要性を説明するためのものと考えられているが、それでは次の二つの問題が生じる。一つ目は、この場合、a39-b3 はもっぱらその前の筋の首位性を説明するための a14-38 の重複となり、全体の議論にとって説明過剰になってしまうという点である。二つ目は、性格を染料として捉えることは極めて不自然だという点である。そのため、Castelvetto (1570)以来、この段落に関して修訂がなされ、論争が繰り広げられてきた。だが、近年の『詩学』研究ではこの箇所に含まれる理解・校訂上の問題点が看過されている。最新の校訂・注釈書である Tarán-Gutas eds. (2012)と Hose ed.(2022)のいずれにおいても、Kassel ed. (1965)と同様にこの箇所は挿入句的説明と見做され丸括弧に入れられている。その際、Tarán-Gutas eds.において、Castelvetto の修訂案は apparatus criticus にすら記録されていない。そして Hose ed.において、Castelvetto の修訂案は記録されてはいるが、それに関する注釈はなされていない。

そのため、本発表は第一に、この箇所をめぐる Castelvetto から Hose までの校訂・注釈史を振り返り、当該箇所の問題点と重要性を確認する。その上で、現在の主流校訂本(Kassel ed., Tarán-Gutas eds., Hose ed.)に従う限り、当該箇所の問題点は解決されえないことを示す。第二に、『詩学』全体で確認できる詩画類比の用例を整理し、当該箇所に関して、独自の解釈を試みる。すなわち、研究史において、類比としての染料が何を指しているのかに関して、解釈は様々になされてきたが、像に関しては、ほとんどの注釈者はそれを筋に対応すると自明視してきた。しかしこの箇所の像は性格に対応する可能性もあると考えられる。本発表は像を性格の類比と捉えることで、この箇所をめぐる難問に新たな解釈を提供する。

スパルタは何を求めたか。Thuc.1.90 および Diodorus Siculus 11.39

大塚英樹

プラタイアの戦いの後、アテーナイは、ペルシアによって破壊された城壁の再建工事を即座に開始する。そのことを知ったスパルタは、すぐさま使節を送り、その工事をやめさせようとする。その際、使節がアテーナイに対し述べた内容が Thuc.1.90 と Diodorus Siculus 11.39 の二箇所に記されている。しかし、その詳細は二つの間で微妙に異なっている。そのどちらが史実であったかを断定することはできない。しかし、どちらの記述の信憑性が高いかといえば、それは明らかに Thuc.の方である。なぜならその方が、アテーナイに対しより受け入れ難い要求を行っているからである。

使節がアテーナイに到着したとき、再建工事はすでに急ピッチで進められていた。スパルタとしては、その工事を即刻停止させる必要があった。ぐずぐずしていれば、城壁が完成してし

まうからである。いかなる手段を用いても、とにかく工事をいったんストップさせる、これが現地に着いたスパルタ使節の緊急の任務であった。それには要求のハードルを下げるにしくはない。Diodorusに見られるバージョンは、まさにそのハードルを下げた要求であるといえよう。しかし、これが、もし史実であったとしたなら、なぜ Thuc.にあるようなバージョンが生れたかを説明することができない。むしろ、使節が実際に求めたのは、Thuc.にある通りで、それが後世の人間によって、およそありそうもないことと見做されたため、改変されたと考える方が妥当であろう。

Thuc.にせよ、Diodorusにせよ、スパルタが城壁の再建をアテーナイに禁じたのは、アテーナイの急速な国力増大をスパルタが妬んだからということになっている。だが、もしそうならスパルタは Thuc.にあるような要求は決してしなかったはずである。スパルタの動機が、すべて *invidia* であったとは考えにくい。それでは、彼らは、当時いかなる考えに基づいて行動していたのであろうか。本発表では、そのことについて考えてみたいと思う。

「夜」の子供たち・「争い」の子供たち——ヘーシオドスによる世界の切り分け 逸身喜一郎

本発表はギリシャ哲学セミナー（2024.9.15）で発表した原稿のフル・ヴァージョンである。先の発表では時間の制約があったため、詳細な例示、ならびに論証にあたる部分が省略された（省略はとりわけ哲学者にはさほど興味深くない箇所集中した）。今回の発表ではそれを補っている。

ヘーシオドス『神統記』211-232では、数々の諸概念が人格化され、「夜」の子供たちと「争い」の子供たちとして並べられている。これらの「神々」が何であるか、どのように理解されていたかの考察が本稿の基軸をなす。以下の引用箇所をあらかじめ読んでおいて発表に臨みたい。それぞれの日本語の訳語はあえてつけないでおく。ひとつひとつの意味を考えることも本稿の目指すところだから。

Νύξ δ' ἔτεκεν στρυγερὸν τε Μόρον καὶ Κῆρα μέλαιναν
καὶ Θάνατον, τέκε δ' Ὕπνον, ἔτικτε δὲ φύλον Ὀνειρίων,
δεύτερον αὖ Μῶμον καὶ Ὀϊζὸν ἀλγινόεσσαν
οὐ τι κοιμηθεῖσα θεὰ τέκε Νύξ ἐρεβεννή,
Ἐσπερίδας θ', ἧς μῆλα πέρην κλυτοῦ Ὠκεανοῖο
χρύσεια καλὰ μέλουσι φέροντά τε δένδρεα καρπὸν.
καὶ Μοίρας καὶ Κήρας ἐγείνατο νηλεοπίλους,
Κλωθῶ τε Λάχεσίν τε καὶ Ἄτροπον, αἶτε βροτοῖσι
γεινομένοισι διδοῦσιν ἔχειν ἀγαθὸν τε κακὸν τε,
αἶτ' ἀνδρῶν τε θεῶν τε παραιβασίας ἐρέπουσιν,

οὐδέ ποτε λήγουσι θεαὶ δεινοῖο χόλοιο,
 πρὶν γ' ἀπὸ τῶ δώωσι κακὴν ὄπιν, ὅς τις ἀμάρτη.
 τίκτε δὲ καὶ **Νέμεσιν**, πῆμα θνητοῖσι βροτοῖσι,
 Νυξ ὀλοή, μετὰ τὴν δ' **Ἀπάτην** τέκε καὶ **Φιλότητα**
Γῆράς τ' οὐλόμενον, καὶ Ἔριν τέκε καρτερόθυμον.
 αὐτὰρ Ἔρις στουγερὴ τέκε μὲν **Πόνον** ἀλγινόεντα
Λήθην τε **Λιμόν** τε καὶ **Ἄλγεα** δακρυόεντα
 Ἵσμινά τε **Μάχας** τε **Φόνους** τ' **Ἀνδροκτασίας** τε
Νεϊκέα τε **Ψευδεά** τε **Λόγους** **Ἀμφιλλογίας** τε
Λυσομίην τ' **Ἄτην** τε, συνήθεας ἀλλήλησιν,
 Ὅρκον θ', ὅς δὴ πλεῖστον ἐπιχθονίους ἀνθρώπους
 πημαίνει, ὅτε κέν τις ἐκὼν ἐπίορκον ὁμόσση.

このカタログの分析に先立つ前提（予備調査）、諸概念の意味の探索、配列を支えている考え方、ならびに分析から発展したトピックはおおむね次のような論旨で進んでいく。以下、派生的な命題も含めて本発表に固有の特徴的な部分を中心に、要旨として箇条書きに列記する。

1. 系譜とは、世界の秩序を単純な形式で表現し理解に供する手段である。
2. 概念と本来的な神々の違い。本来的な神々の定義。①それらが特定の場所に固有の神域さらには神殿をもち、そこでは歴史がたどりつけないほどに古い時代から祭儀が厳密なルールに基づいて執り行われ、②それらが人間に及ぼす力を具体的に把握でき、その力の現れに基づいた神話があって、③何よりもその名前が普通名詞ではなく固有名詞である。
3. 本来的な神も語源分析されて普通名詞に還元されることがある。名前と音の一致が事物の本質を表すと考える考え方は人間の思考に奥深くある。エンペドクレスやアイスキュロスの時代までそれは絶えることなく続く。ヘーシオドスの営みは語源分析に頼って事物の性質の説明をする学問の端緒である。
4. 神々と人間以外の種族を一部認めるにせよ、ギリシャ人は不死なる神々 *ἀθάνατοι* と死すべき人間 *θνητοί* の二分法を優先させる。だから「夜」や「争い」の子供たちはどれも本来的な神々とは異質であるが、それでも神々であり、本来的な神々と性質を共有する。
5. Ἰμερος を題材として「概念」が「神」とされることの予備調査。古典期以前のギリシャ語にあっては、愛憎に関するコトバには4つの項目、すなわち ①人が抱いている気持ち ②対象が備えている資質 ③人を駆り立てる力 ④その先の行動 が、ときにはすべて一緒に、ときにその中のいくつかが重なり合っており、それらがひとつのコトバで言い表される。大なり小なりこれは神とされる他の概念にも妥当する。
6. 「夜」の子供の Μῶμος。アルカイック期の Μῶμος は、あまり知られてはいないが Θάνατος や Μοῖραι と同じ程度に既存の人格神である。
7. Μῶμος, Οἰζύς, Ἐσπερίδες は Ἔρις とともに一貫してトロイア戦争に関連づけられる。
8. 「パリスの審判」のエピソードを『イーリアス』は知っていながらも排除する。「黄金の

リンゴ」も同様に、ホメーロスも、そしてヘーシオドスは知っていたはずである。「不和のリンゴ」「黄金のリンゴ」「ヘスペリデスの園のリンゴ」は文献的には徐々に拡大されたかのように見えるが、当初から民話の中で混在した。

9. 物語で語られる出来事の順序（筋道）と、エピソード成立の順序とを混同してはならない。
10. *Ἀπάτη*, *Φιλότης*, *Γῆρας* の連関からは（社会保障という制度がない時代の）女性憎悪が読み取れる。
11. 夜の子供たちというカタログの内部では、神話ないし民話という物語の筋のうえでの連関と、モノの性質による連関と併置されている。概念が神として扱われるということは、抽象化された概念としての意味も保持していながらも、かつそれとともに人格神として民話ないし神話の登場人物となりうることでもある。
12. 夜と昼とは同等ではなくて、夜が昼よりも先にあり、昼は夜から派生し、しかも毎日、夜によって滅ぼされる。闇は光よりも先にある。死は生よりも先にある。夜は無に帰さしめる力の根源である。
13. 「争い」の子供たち。*Λήθη*, *Λιμός*, *Ἄλγεια* の3項目はヘクサメトロス1行にトリオとなる3単語を入れる際の典型的な単語配列法によっている。こうした場合、3単語は密接に連関する。*Λήθη* とは不注意、ないし配慮のなさをもたらす力である。
14. 親子を厳密に考えて親が先にあって子が生じるとする考え方と、子供たちの類似の根拠を親とする（今日の種と属との関係に等しいとする）考え方は、ヘーシオドスには区別されていなかった。
15. 総じてヘーシオドスのカタログには否定的概念が多く、肯定的概念は少ない。
16. *Δυσνομία* は *Ἔρις* の子供のひとりだが、その反対概念（肯定的概念である）の *Εὐνομία* を、ヘーシオドスはゼウスと *Θέμις* の娘として位置づけている。
17. ヘーシオドスは *Θέμις* を重視する。ヘーラーに先立つゼウスの妻とされ、*Εὐνομία* のみならず *Δίκη*, *Ειρήνη* の三姉妹を産んだ。
18. *Θέμις* と *Μνημοσύνη* はティーターンの一族とされパラレルな関係にある。*Μνημοσύνη* があればこそ *Μοῦσαι* が存立するように、*Θέμις* あればこそ *Εὐνομία*, *Δίκη*, *Ειρήνη* がある。
19. *Θέμις* に先だって *Μῆτις* がゼウスの正妻であった。「知恵」こそがゼウスの根拠であり、「先例」に先行するものなのである。
20. *Μῆτις* を呑み込んだことによりゼウスの覇権は確立する。この神話はテティスを断念したという神話よりも、むしろヘーシオドスの世界観を反映している。
21. ヘーシオドスは自分の独創性を発揮せんとして、それまでの考え方と違う主張をしたのではない。あくまで彼は正しい分類を試みた。ヘーシオドスの分類も後の世では奇妙に見えることがあったとしても、ヘーシオドス個人の個性がそれを選ばせたのではないことを忘れてはならない。